館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第42集

館林市内遺跡発掘調査報告書

― 平成17年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 ―

中島遺跡（平17地点）

咄戸沼遺跡（平17地点）

志柄１遺跡（平17地点）

南美園町遺跡（平17地点）

大袋４遺跡（平17地点）

大街道遺跡（平17地点）

八方遺跡（平17Ａ地点）

高根古墳群（平17地点）

八方遺跡（平17Ｂ地点）

中堤遺跡（平17地点）

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第42集

館林市内遺跡発掘調査報告書

― 平成17年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 ―

中島遺跡（平17地点）

咄戸沼遺跡（平17地点）

志柄１遺跡（平17地点）

南美園町遺跡（平17地点）

大袋４遺跡（平17地点）

大街道遺跡（平17地点）

八方遺跡（平17Ａ地点）

高根古墳群（平17地点）

八方遺跡（平17Ｂ地点）

中堤遺跡（平17地点）

館林市教育委員会

例　　言

1．本書は、平成17年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき次のとおりである。地点名は、平成17年度の調査であることから、「平成17年度地点」とする。なお、八方遺跡については今年度２箇所調査を行ったため、「平成17年度地点Ａ」（平17Ａ地点）と「平成17年度地点Ｂ」（平17Ｂ地点）に区別する。

中島遺跡　　咄戸沼遺跡　　志柄１遺跡　　南美園町遺跡　　大袋４遺跡
大街道遺跡　　八方遺跡　　高根古墳群　　中堤遺跡

2．調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会	
担　当　課	文化振興課文化財係	
調査組織	教育長	大塚文男
	教育次長	三田正信
	文化振興課長	菅沼道雄
	文化財係長	岡屋英治
	主査（学芸員）	阿部弥生
	主任（学芸員）	原　幸恵
	主任	荒川博一（副担当）
	主事	釜島美貴
	主事（学芸員）	吉田紋乃
	主事補（学芸員）	吉村昭和（担当）
	調査に係る作業員	

4．調査に係る作業員は、館林市教育委員会で雇用した。

5．調査による出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。

6．本書の編集・執筆については、吉村、荒川が中心となり行った。

7．調査の実施および本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申しあげる次第である。（順不同、敬称略）

駅西土地区画整理課　　道路河川課　　都市計画課　　水道課
群馬県警察本部　　地権者各位　　館林市史編さんセンター

凡　　例

1．本書における挿図の縮尺は、挿図中に記した。

2．遺跡位置図は、館林市都市計画図（Ｓ＝１/10000）を１/5000に拡大し用いた。
なお遺跡位置図中のスクリーントーン は遺跡地、 は調査地を示している。

3．トレンチ図は、館林市道路台帳（Ｓ＝１/1000）を用いた。
なおトレンチ図中のスクリーントーン は遺構を示している。

4．写真図版で▲印を付した写真は、紙面の都合により写真左を上、写真右を下に配置した。

目　　次

例　　言……1
凡　　例……1
目　　次……2
挿図目次・写真図版目次……2
第１章　館林市の環境……3
　１．地理的環境……3
　２．歴史的環境……3
第２章　調査の概要……5
　１．中島遺跡……5
　２．咄戸沼遺跡……6
　３．志柄１遺跡……7
　４．南美園町遺跡……8
　５．大袋４遺跡……9
　６．大街道遺跡……10
　７．八方遺跡（平17Ａ地点）……11
　８．高根古墳群……12
　９．八方遺跡（平17Ｂ地点）……13
　10．中堤遺跡……14
写真図版……15
報告書抄録……19

挿図目次

第１図　館林市の位置……3
第２図　館林市の地形概念図……4
第３図　平成17年度調査遺跡の位置……4
第４図　中島遺跡……5
第５図　トレンチ配置図……5
第６図　咄戸沼遺跡……6
第７図　トレンチ配置図……6
第８図　志柄１遺跡……7
第９図　トレンチ配置図……7
第10図　南美園町遺跡……8
第11図　トレンチ配置図……8
第12図　大袋４遺跡……9
第13図　トレンチ配置図……9
第14図　大街道遺跡……10
第15図　トレンチ配置図……10
第16図　八方遺跡（平17Ａ）……11
第17図　トレンチ配置図……11
第18図　高根古墳群……12
第19図　トレンチ配置図……12
第20図　八方遺跡（平17Ｂ）……13
第21図　トレンチ配置図……13
第22図　中堤遺跡……14
第23図　トレンチ配置図……14

写真図版目次

写真図版１……15
　1－1　中島遺跡　調査地（南より）
　1－2　中島遺跡　重機掘削状況
　1－3　中島遺跡　４Ｔ完掘（南より）▲
　2－1　咄戸沼遺跡　調査地（西より）
　2－2　咄戸沼遺跡　１Ｔ完掘（東より）▲
　3－1　志柄１遺跡　調査地（北より）
　3－2　志柄１遺跡　２Ｔ完掘（北より）▲
　4－1　南美園町遺跡　調査地（南より）
写真図版２……16
　4－2　南美園町遺跡　１Ｔ完掘（南より）▲
　5－1　大袋４遺跡　調査地（西より）
　5－2　大袋４遺跡　４Ｔ完掘（東より）
　6－1　大街道遺跡　調査地（北より）
　6－2　大街道遺跡　１Ｔ完掘（南より）▲
　7－1　八方遺跡（平17Ａ）　調査地（西より）
　7－2　八方遺跡（平17Ａ）　１Ｔ完掘（東より）▲
　7－3　八方遺跡（平17Ａ）　１号住居址
写真図版３……17
　8－1　高根古墳群　調査地（北より）
　8－2　高根古墳群　調査状況
　8－3　高根古墳群　１Ｔ完掘（北より）▲
　9－1　八方遺跡（平17Ｂ）　調査地（西より）
　9－2　八方遺跡（平17Ｂ）　１Ｔ完掘（西より）▲
　10－1　中堤遺跡　調査地（東より）
　10－2　中堤遺跡　調査状況
　10－3　中堤遺跡　１Ｔ完掘（東より）▲

第１章　館林市の環境

１．地理的環境

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約８万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60㎢である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県―埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、首都東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県東南部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、群馬県の中では低地に位置している。館林市の標高は、15m台（大島町東部）から33m台（高根町）であり、おおむね平坦であるといえる。

本市の地形を概観すると、「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がる。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根に至る台地の北側に沿って、日本最古の砂丘の一つである埋没河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。

こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。

「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積低地から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川および城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴のひとつになっている。

第１図　館林市の位置

２．歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ケ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144ケ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡３遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は０（弥生時代の遺物を採取できた遺跡１遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳総数25基）、中世生産址１遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址２遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめたものである。）

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。

館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

《旧石器時代》

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘（自然堤防）上に、その多くが確認されている。

《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。

前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。

後期以降は遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晩期の包含層等は低地（沖積地）におよぶ。

《弥生時代》

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されて

いる。

《古墳時代》

前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。

中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。

後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。

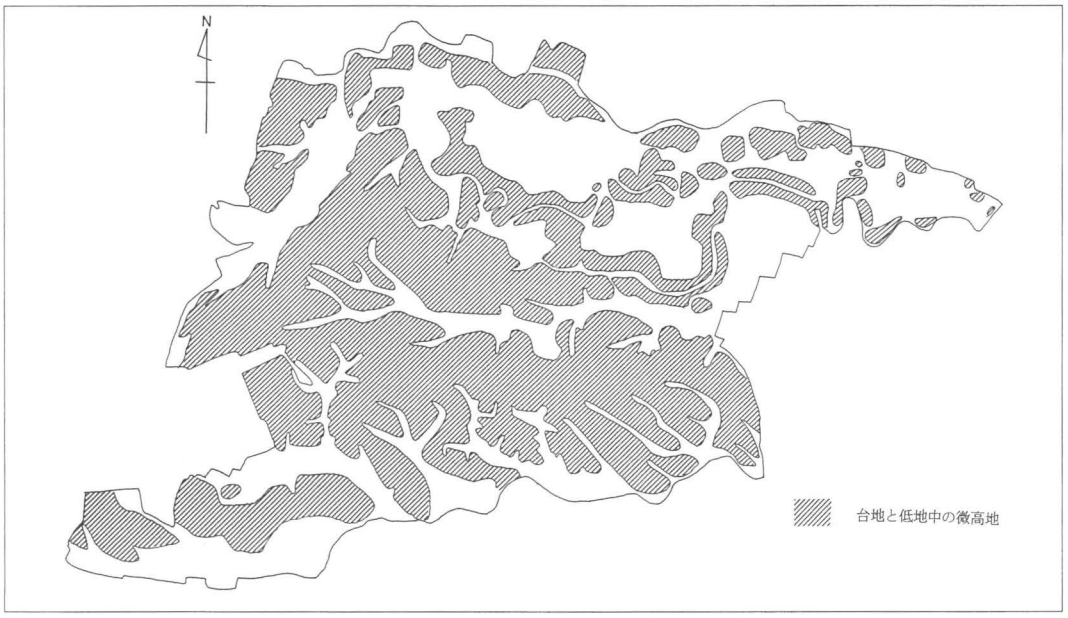
墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が２ケ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが、谷や谷地等をみおろす洪積台地上に所在している。

《奈良・平安時代》

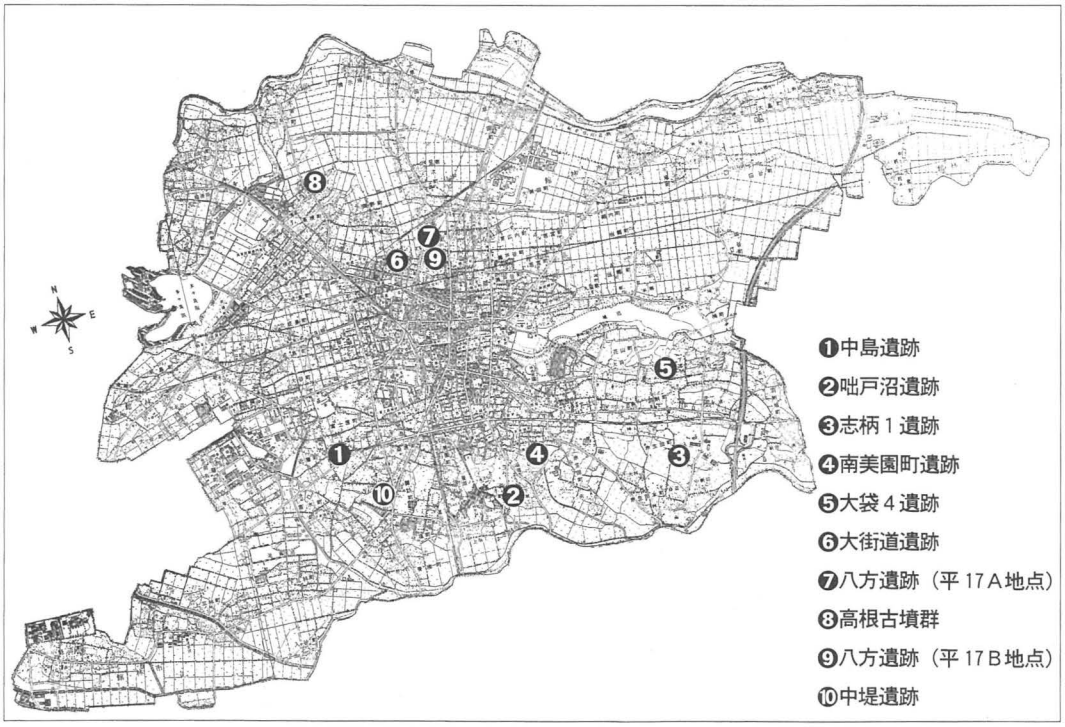
この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採取ができることから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

《中世・近世》

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、現在の館林市の基礎となった。



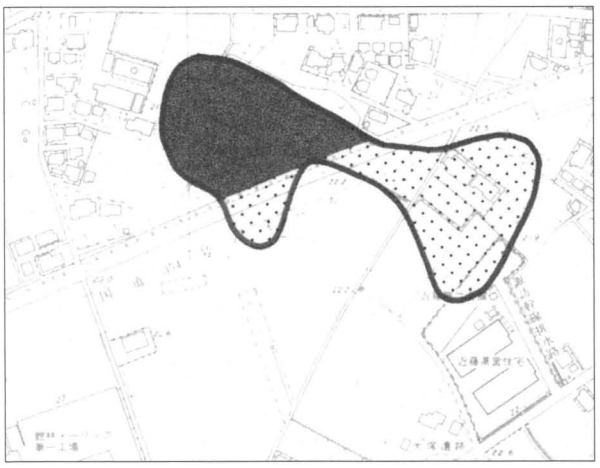
第２図　館林市の地形概念図



第３図　平成17年度調査遺跡の位置

第２章　調査の概要

１．中島遺跡



第４図　中島遺跡（1：5000）

所 在 地
館林市富士原町字中島1048-2，1049-1，1050，1051，甲1052，乙1052，1053
近藤町字大塚35-1，36-3，乙40，40-1，40-3，41-1

調査原因　土地区画整理
（館林市西部第二土地区画整理）

調査期間　平成17年５月15日～６月１日

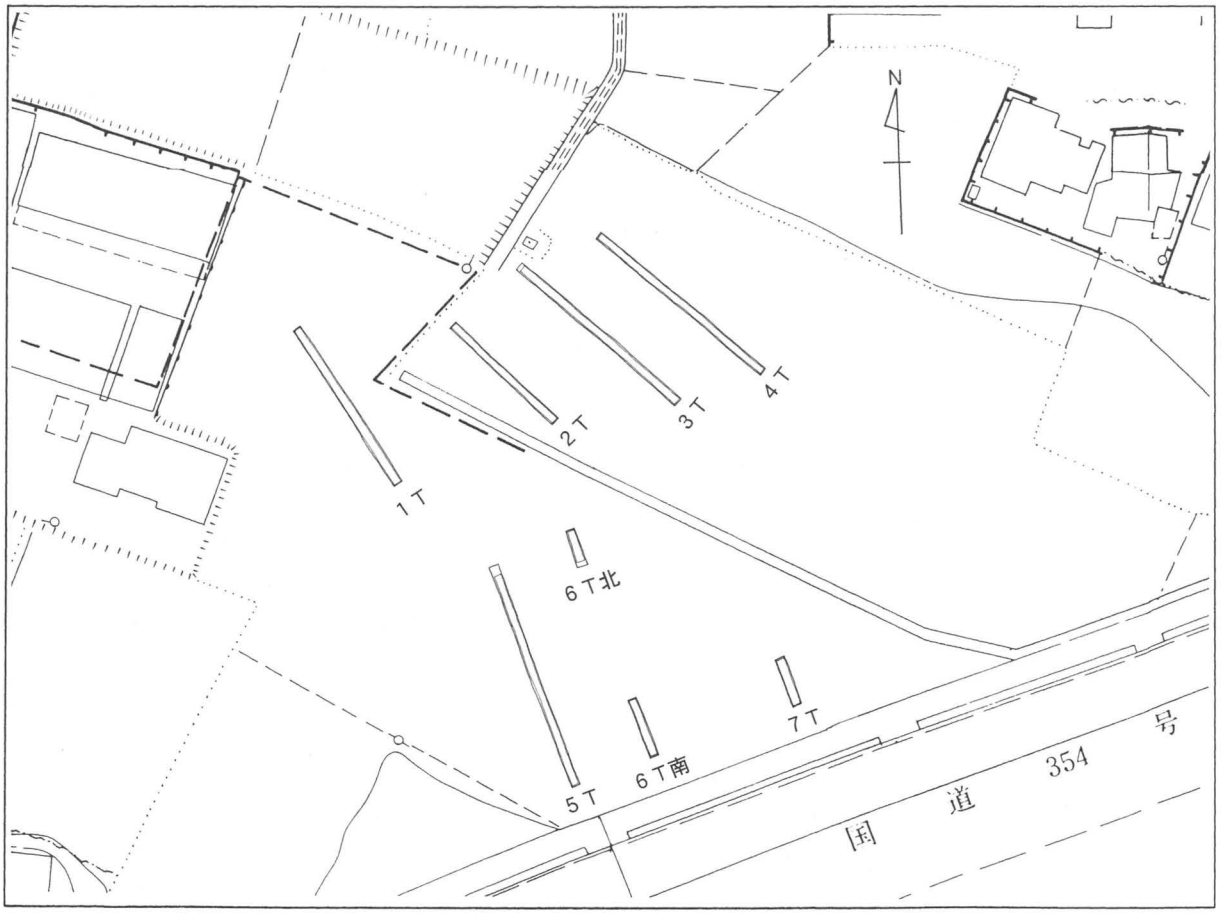
調査面積　9,012㎡

調査の概要

調査地に７本のトレンチを設定し、バックホウにより表土排除を行った。表土以下の土を、土層断面の確認を行いながら、人力により掘り下げるとともに、平面精査を行い、遺構・遺物の確認を行った。

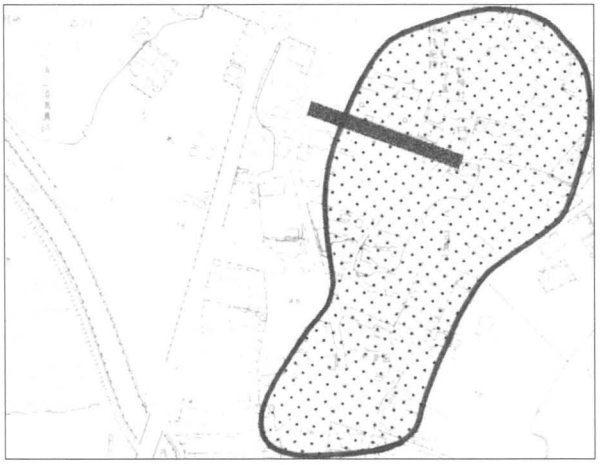
現地表面からローム面までの深度は１～４トレンチで約80～120cmであった。遺構としては溝３条（１トレンチ１号溝・２号溝＝中世以降，４トレンチ１号溝＝近世以降）を確認した。遺物は土師器片等が出土した。

調査で確認された遺構は溝３条で、中世～近世以降のものである。溝までの深度は100cm程であるが、現地表面より上に100cm盛土を行う工事計画である。また、５・６トレンチにおいては既に100cmほど盛土が施されており、ローム面は保存された。さらに、７トレンチでは天地返しが行われており、ローム層上部が削平されていた。したがって、開発にあたっては遺構保存ができるため、開発には支障が無いと判断した。



第５図　トレンチ配置図（1：1000）

2．咄戸沼遺跡



第６図　咄戸沼遺跡（1：5000）

所 在 地
館林市堀工町字咄戸沼721-8，722-3，723-4，728-4，728-25，728-26，729-3，729-4，731-3
堀工町字熊野浦735-2、736-4，737-2，738-2，739-2，740-4，741-2，742-3，743-3，732-5，732-6，732-7，734-4，734-5，734-6

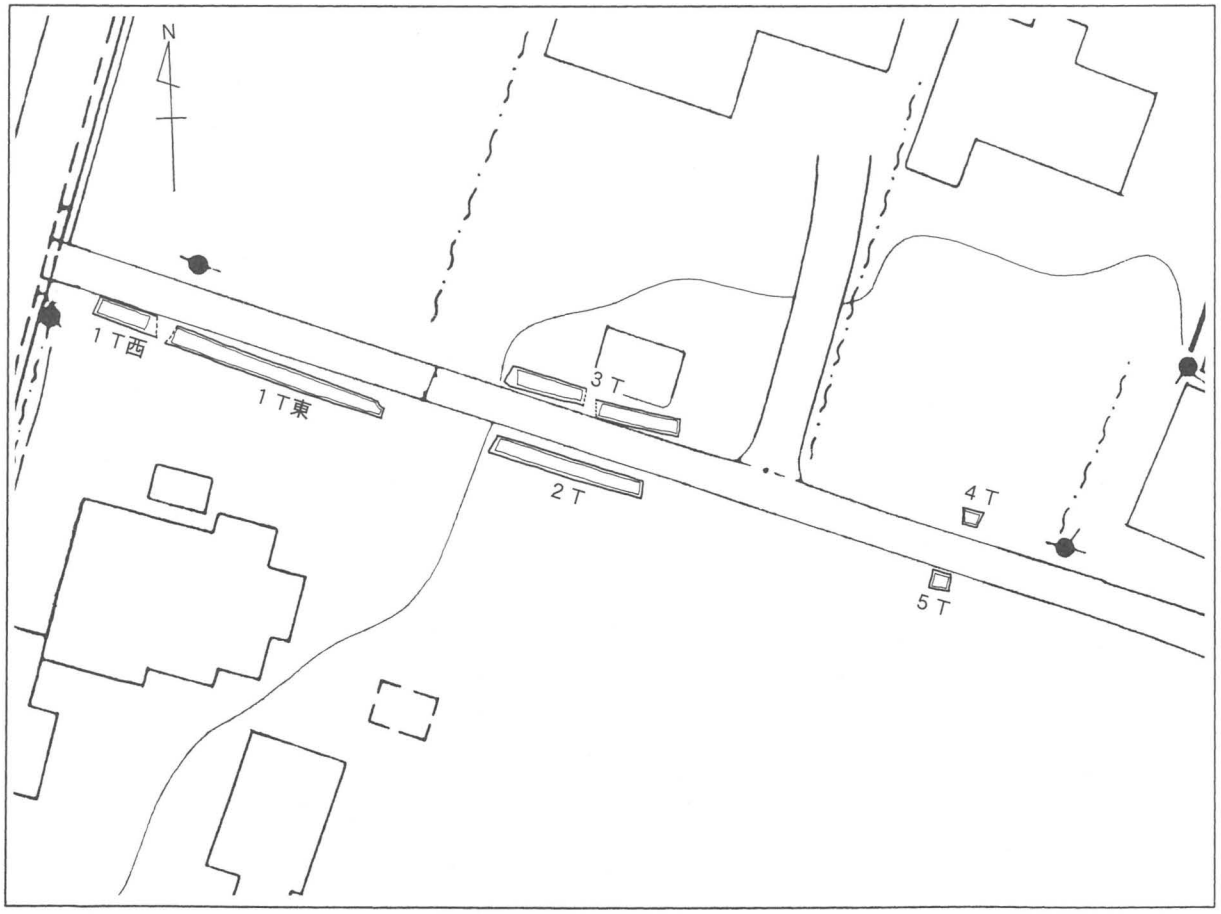
調査原因　道路改良工事（市道5097号線）
調査期間　平成17年５月23日～５月31日
調査面積　360.17㎡

調査の概要

調査地内に現況に合わせて５本のトレンチを設定し、バックホウにより表土排除を行った。表土以下の土を、土層断面の確認を行いながら、人力により掘り下げるとともに、平面精査を行い、遺構･遺物の確認を行った。

現地表面からローム面までの深度は約30～70cmであった。一括３点を含めて、縄文土器片が大量に出土したが、明確な遺構は確認できなかった。

ローム面までの確認深度は30～70cmと浅いが、調査地において明確な遺構は確認できなかった。その理由としては、まず重機掘削可能な部分のみで調査を実施したため調査範囲が極めて狭かった点、樹木の根や既存道路建設工事の際に部分的に攪乱されたような痕跡があり、地下の傷みが激しい点があげられる。遺跡としての重要度は高いと思われるが、遺構が確認できないため、開発には支障無しと判断した。



第７図　トレンチ配置図（1：500）

3．志柄１遺跡

第８図　志柄１遺跡（1：5000）

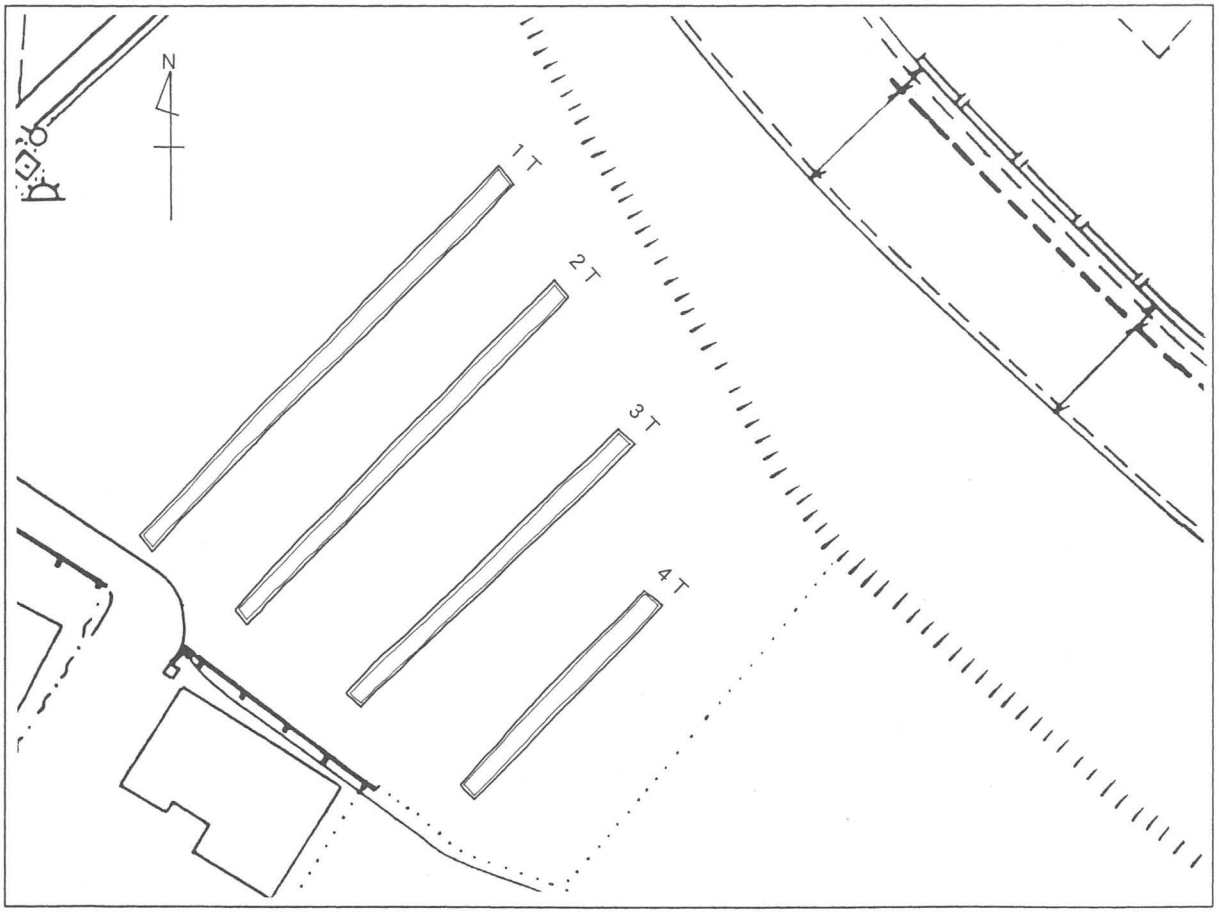
所 在 地
館林市赤生田町字中島1863，1864-1，1875，1865-3
調査原因　警察官待機宿舎建設工事
調査期間　平成17年６月12日～７月３日
調査面積　2,023㎡

調査の概要

調査地内に現況に合わせて４本のトレンチを設定し、バックホウにより表土排除を行った。表土以下の土を、土層断面の確認を行いながら、人力により掘り下げるとともに、平面精査を行い、遺構･遺物の確認を行った。

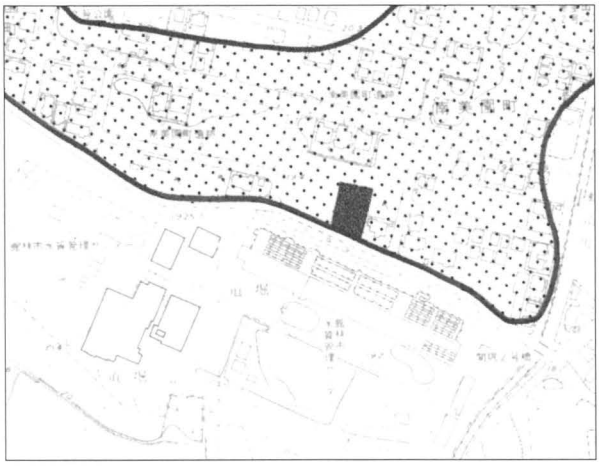
現地表面からローム面までの深度は１トレンチで約70～150cm、４トレンチで約25～130cmであった。いずれのトレンチにおいてもローム層内で、地下水中の鉄分が葦など植物の根の周りに水酸化鉄となり、管状・紡錘状に沈殿したと思われる状態がみられた。調査地旧地表はトレンチ中央を境にして、南部から北部にかけて急激に傾斜し、北部は低湿地であったことが確認された。遺構はなく、出土遺物も縄文土器片が数点出土しただけであった。

今回の調査で確認された遺構は無かった。したがって開発にあたって埋蔵文化財への支障は無いと判断した。



第９図　トレンチ配置図（1：500）

4．南美園町遺跡



第10図　南美園町遺跡（1：5000）

所 在 地
館林市南美園町11-9
調査原因　宅地分譲
調査期間　平成17年６月12日～７月３日
調査面積　633.87㎡

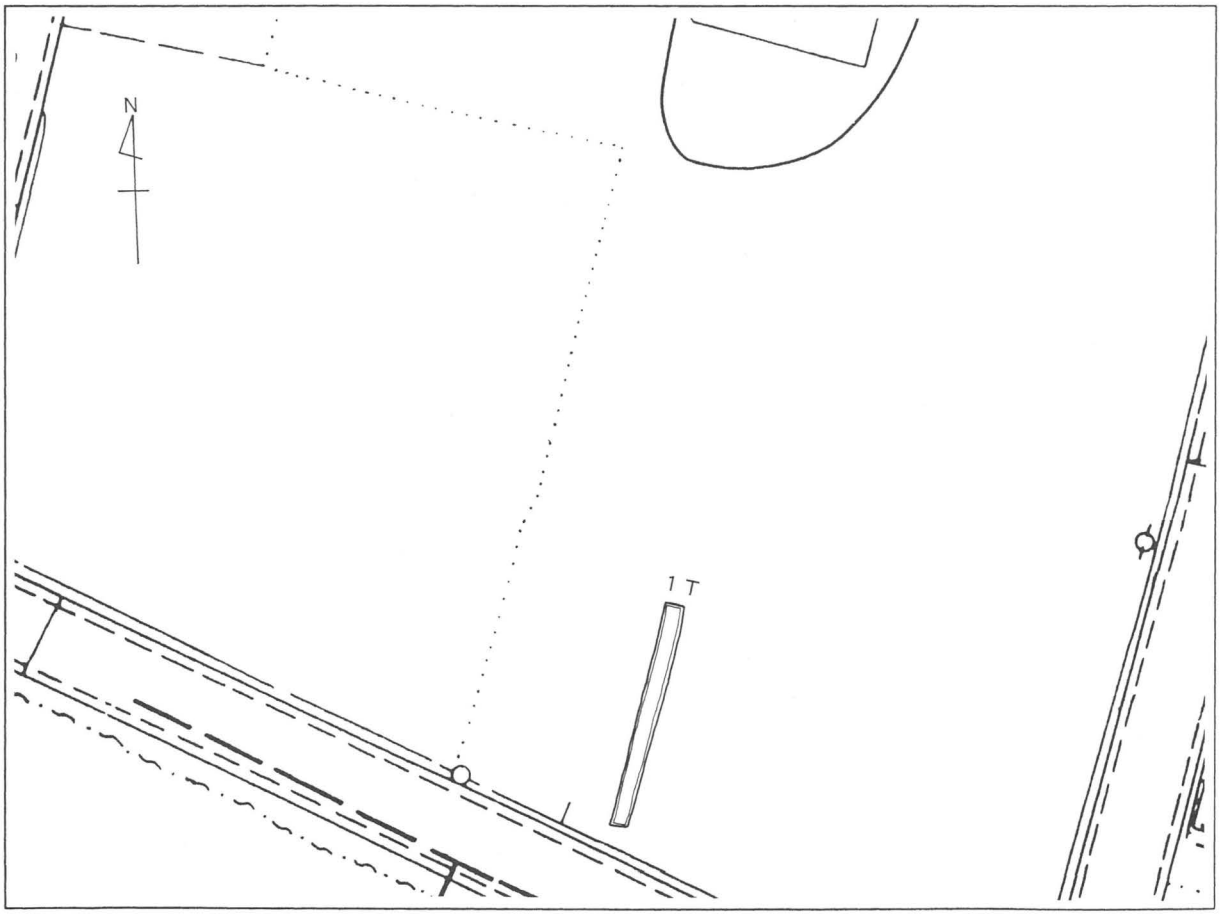
調査概要

調査地内に現況に合わせて１本のトレンチを設定し、バックホウにより表土排除を行った。表土以下の土を、土層断面の確認を行いながら、人力により掘り下げるとともに、平面精査を行い、遺構・遺物の確認を行った。

現地表面からローム面までの深度は約45～70cmであった。攪乱および造成等の痕跡がみられた。

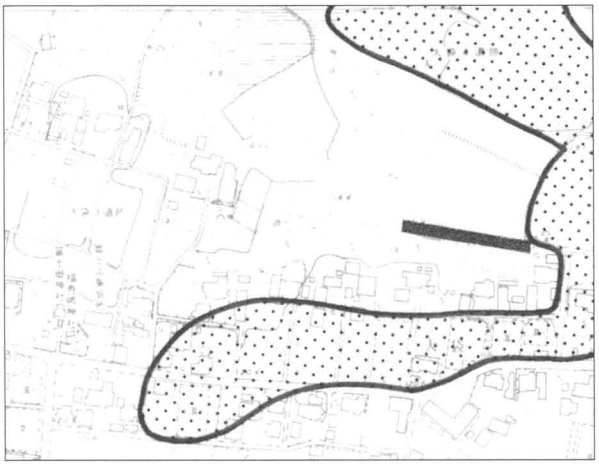
遺構は無く、遺物は縄文土器片が数点出土した。

トレンチ内に攪乱がみられ、またローム面上に砂利やゴミ等を含んだ層もあり、既にローム面が掘削されていたと考えられる。したがって開発工事にあたって埋蔵文化財への支障は無いと判断した。



第11図　トレンチ配置図（1：500）

5．大袋４遺跡



第12図　大袋４遺跡（1：5000）

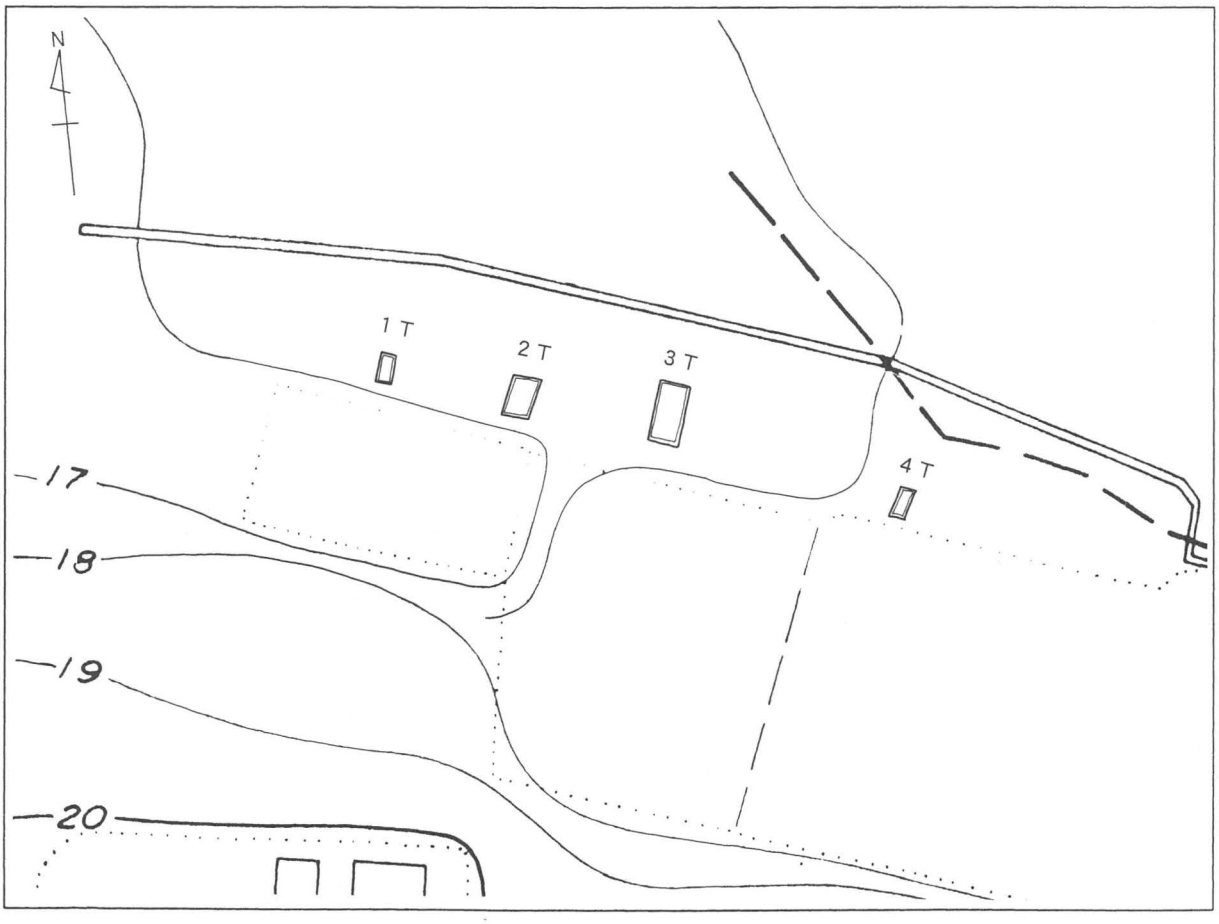
所 在 地
館林市花山町字大袋2103，2104，2105-2，2106-2，
2107-2
調査原因　道路改良工事（市道4218号線）
調査期間　平成17年７月19日～７月20日
調査面積　489.19㎡

調査概要

調査地内に現況に合わせて４本のトレンチを設定し、人力により表土排除を行った。表土以下の土を、土層断面の確認を行いながら、人力により掘り下げるとともに、平面精査を行い、遺構・遺物の確認を行った。

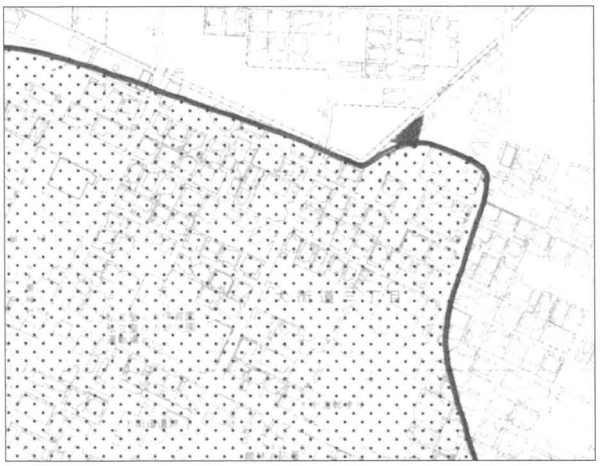
現地表面から黒色の腐植土層までの深度は約70～80cmであり、上部に砂利等を客土した痕跡があった。遺構はなく、縄文土器片等が数点出土した。

１～４トレンチともにローム層は確認できなかった。腐植土層が確認できた３・４トレンチ内では、腐植土層上に砂利やゴミ等を含んだ客土の痕跡がみられた。調査地は湿地であったが、埋め立てを行い、その際に腐植土層が掘削されていたと考えられる。したがって開発にあたって埋蔵文化財への支障は無いと判断した。



第13図　トレンチ配置図（1：500）

6．大街道遺跡



第14図　大街道遺跡（1：5000）

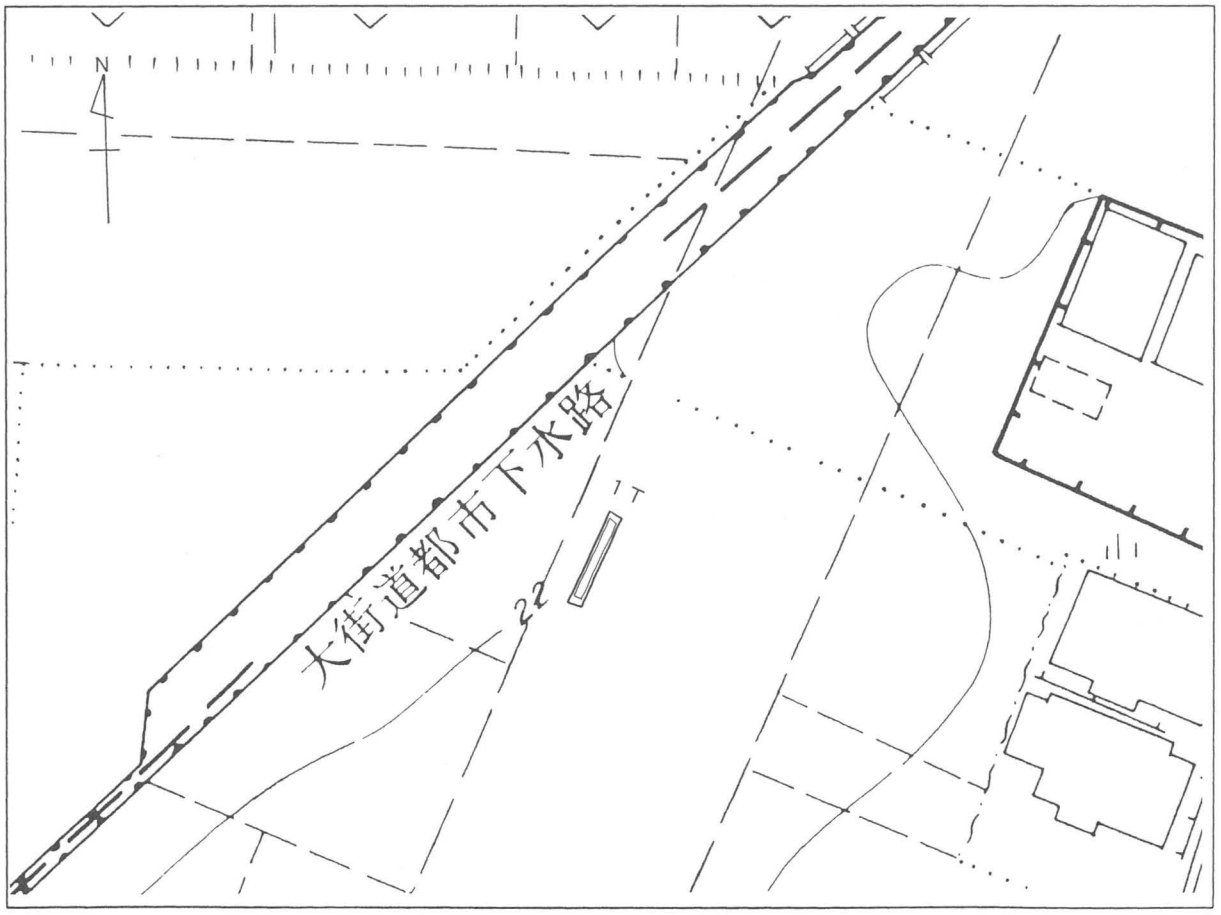
所 在 地
館林市大街道三丁目1081-1，1019
調査原因　道路改良工事
（都市計画道路３・４・７西部１号線）
調査期間　平成17年９月16日～９月18日
調査面積　4,080㎡

調査の概要

調査地内に現況に合わせて１本のトレンチを設定し、バックホウにより表土排除を行った。表土以下の土を、土層断面の確認を行いながら、土木重機により掘り下げるとともに、平面精査を行い、遺構・遺物の確認を行った。

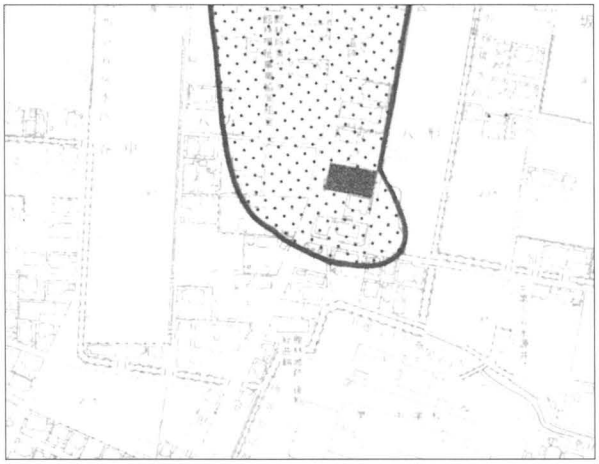
現地表面から黒色の腐植土層までの深度は約120cmであった。遺構は無く、土師器片等が数点出土した。

１トレンチで腐植土層を確認した。腐植土層直下に赤褐色砂層が広がっていたため、調査地は湿地であったと考えられる。したがって開発にあたって埋蔵文化財への支障は無いと判断した。



第15図　トレンチ配置図（1：500）

7．八方遺跡（平17Ａ地点）



第16図　八方遺跡（平17Ａ）（1：5000）

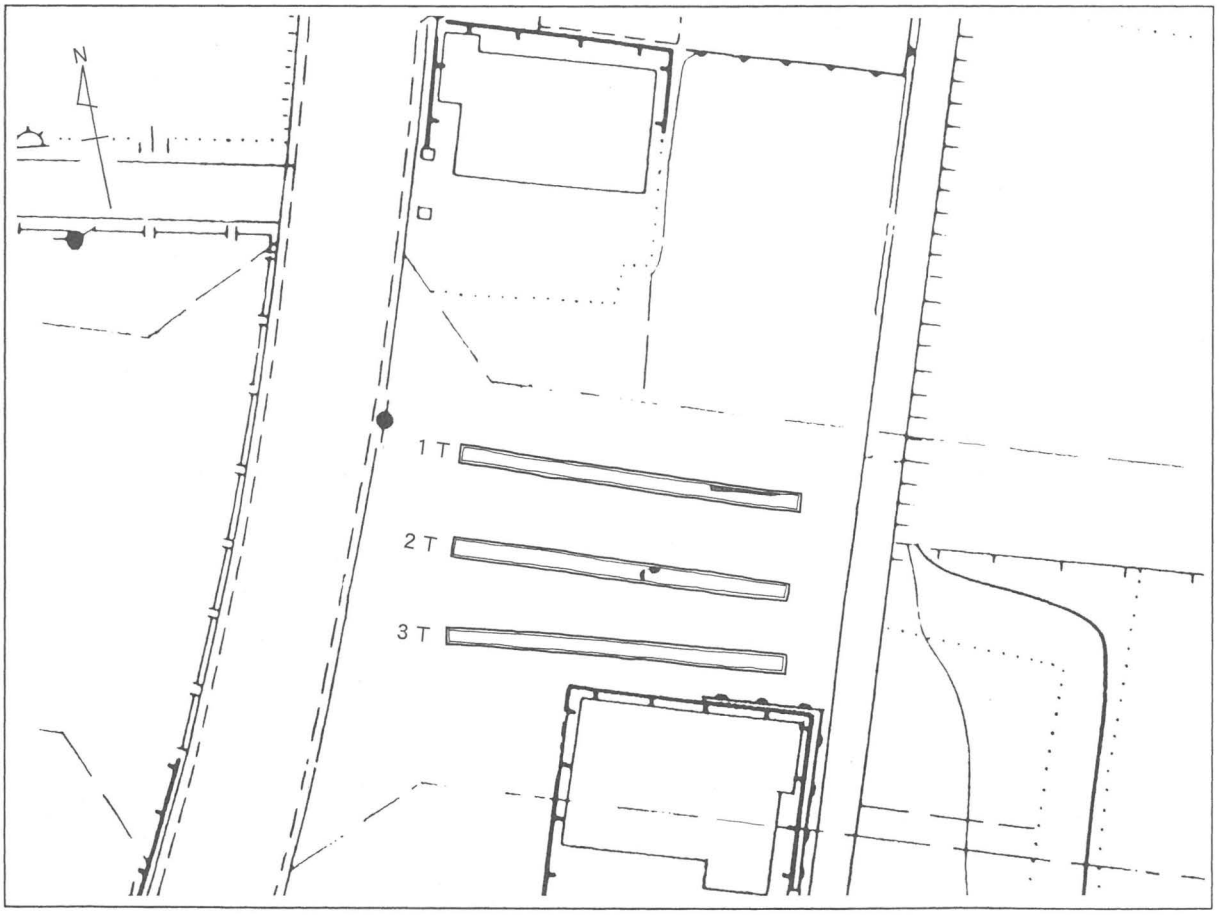
所 在 地
館林市坂下町字八形3233-3
調査原因　道路改良工事
（都市計画道路３・３・３青柳・広内線）
調査期間　平成17年10月25日～11月１日
調査面積　864㎡

調査の概要

調査地内に現況に合わせて東西方向にトレンチを３本設定し、バックホウにより表土排除を行った。表土以下の土を、土層断面の確認を行いながら、人力により掘り下げるとともに、平面精査を行い、埋蔵文化財の有無、状況、深度等の確認を行った。

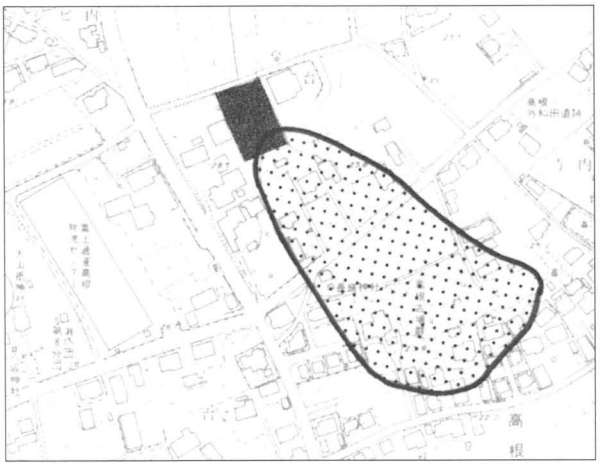
現地表面からローム面までの深度は１トレンチで約20～90cm、２トレンチで約20～40cmであった。確認された遺構は古墳時代中期の住居址が２軒であった。（１トレンチ東部に１軒、２トレンチ中央部に１軒）その他、ピット、溝３条（近世）が確認された。出土遺物としては土師器片等があり、壺、坩、高坏の完形を検出した。

調査で確認された遺構は古墳時代中期の住居址２軒であった。調査地周辺は既往調査でも古墳時代住居址が多数確認されたことから、古墳時代中期の集落であったと考えられる。開発にあたっては、本調査の実施が必要であると判断し、館林市役所都市計画課と改めて協議を行い、平成17年12月に記録保存のための本調査を行った。



第17図　トレンチ配置図（1：500）

8．高根古墳群



第18図　高根古墳群（1：5000）

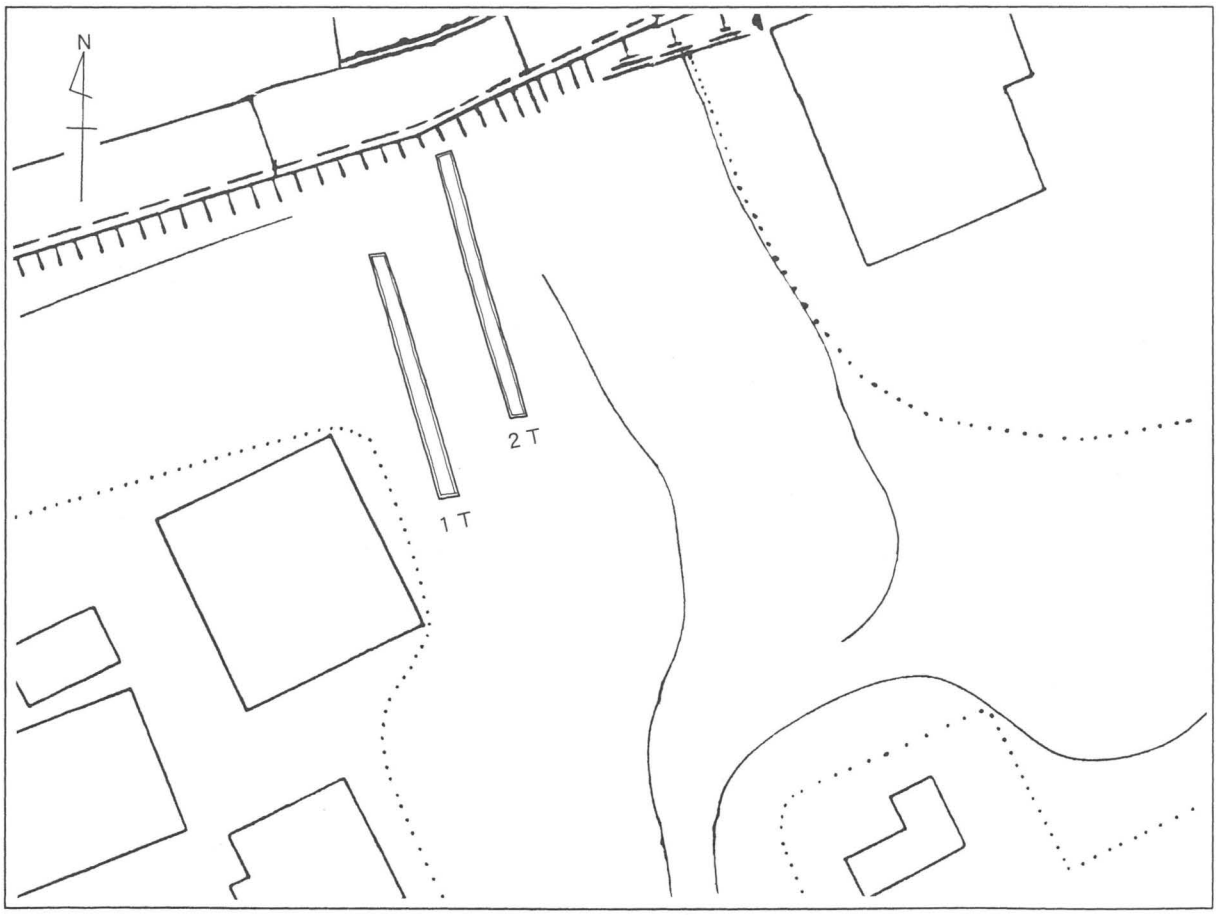
所 在 地
館林市高根町字台1171-1
調査原因　移動無線基地局設置工事
調査期間　平成17年11月29日～12月17日
調査面積　330㎡

調査の概要

調査地内に現況に合わせて２本のトレンチを設定し、バックホウにより表土排除を行った。表土以下の土を、土層断面の確認を行いながら、人力により掘り下げるとともに、平面精査を行い、遺構・遺物の確認を行った。

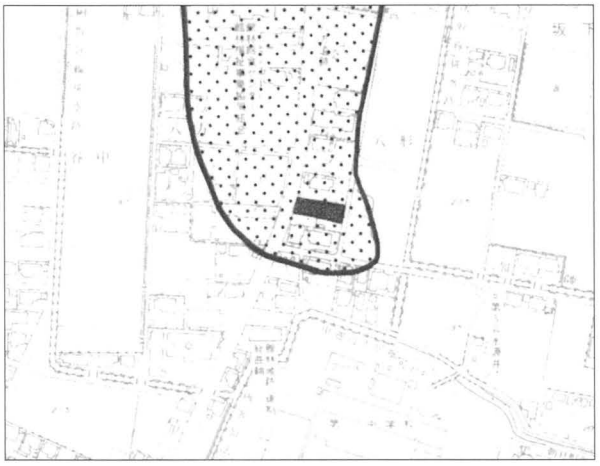
ローム面までの深度は現地表面から約40～120cmであった。遺構は無く、出土遺物は土師器片、須恵器片が数点確認された。

調査区域内で確認された遺構は無く、開発工事にあたって埋蔵文化財への支障は無いと判断した。



第19図　トレンチ配置図（1：500）

9．八方遺跡（平17Ｂ地点）



第20図　八方遺跡（平17Ｂ）（1：5000）

所 在 地
館林市坂下町字八形3233-4
調査原因　道路改良工事
（都市計画道路３・３・３青柳・広内線）
調査期間　平成18年１月16日～１月26日
調査面積　200㎡

調査の概要

調査地内に現況に合わせて東西方向にトレンチを１本設定し、バックホウにより表土排除を行った。表土以下の土を土層断面の確認を行いながら、人力により掘り下げるとともに、平面精査を行い、埋蔵文化財の有無、状況、深度等の確認を行った。

現地表面からローム面までの深度はトレンチ東部で約100cm、トレンチ西部で約10cm～40cmであった。確認された遺構は無い。出土遺物は縄文土器片、土師器片等を確認した。

調査で確認された遺構は無かった。調査地北は平成17年11～12月に本調査を行い、古墳時代住居址を３軒確認したが、今回の調査では遺構は検出されなかった。したがって開発にあたっては支障が無いと判断した。

第21図　トレンチ配置図（1：500）

10. 中堤遺跡

第22図　中堤遺跡（1：5000）

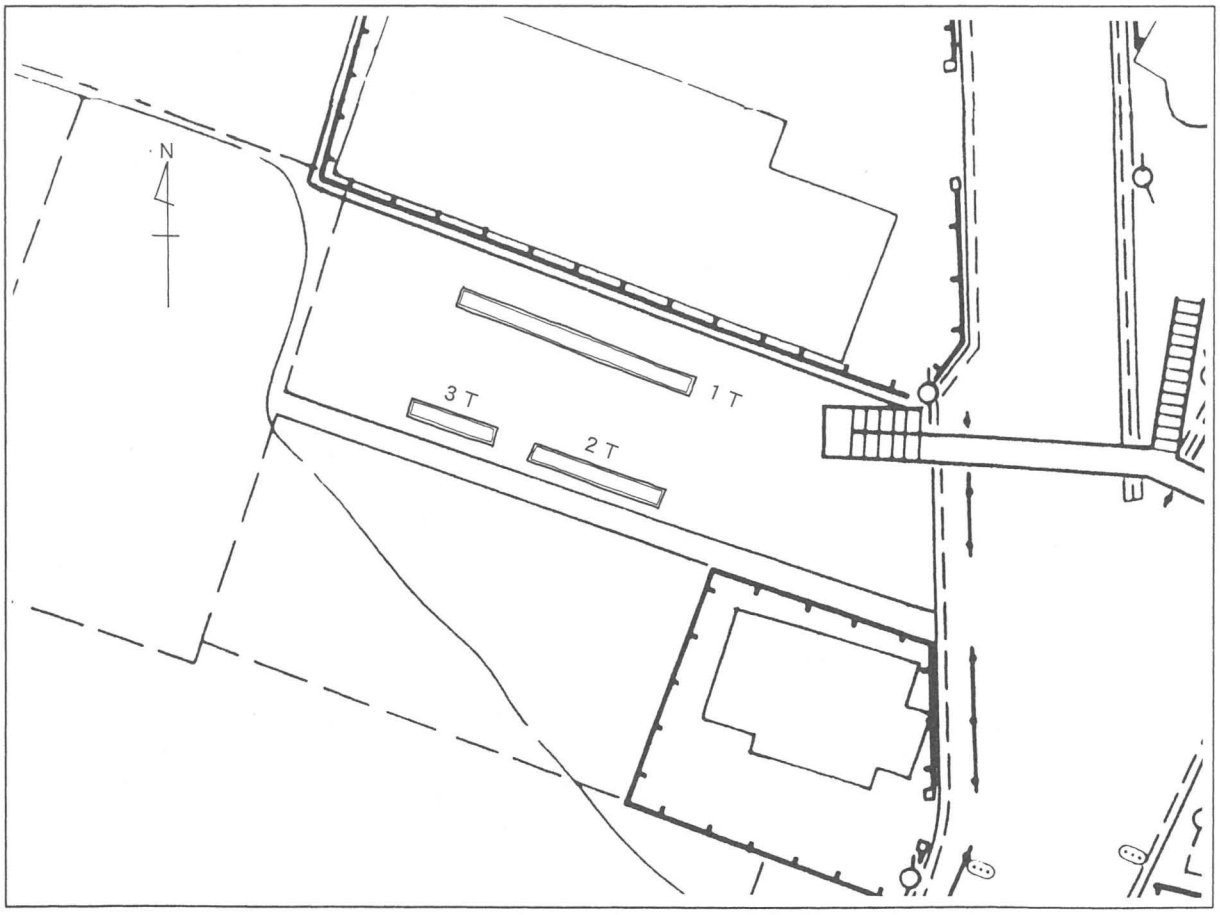
所 在 地
館林市諏訪町字中堤1447-4
調査原因　運送会社駐車場建設工事
調査期間　平成18年２月３日～２月18日
調査面積　633㎡

調査の概要

調査地内に現況に合わせて東西方向にトレンチを３本設定し、バックホウにより表土排除を行った。表土以下の土を、土層断面の確認を行いながら、人力により掘り下げるとともに、平面精査を行い、埋蔵文化財の有無、状況、深度等の確認を行った。

現地表面からローム面までの深度は約80～100cmであり、攪乱や客土などがみられた。確認された遺構・遺物は無かった。

調査で確認された遺構は無かった。攪乱などがみられ、旧耕作土とみられる土層のうえには数層にわたる客土がみられた。したがって開発にあたっては支障が無いと判断した。



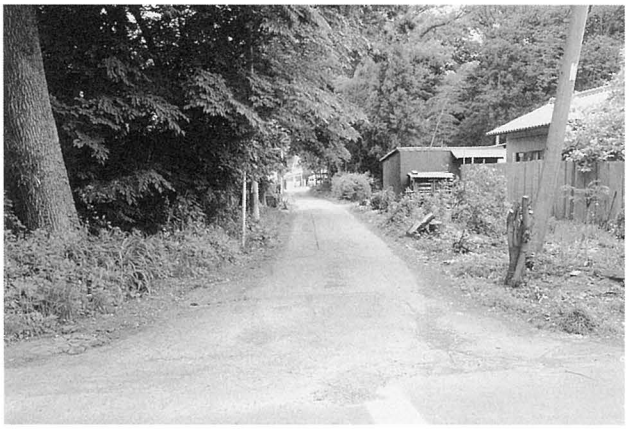
第23図　トレンチ配置図（1：500）

写真図版１

１－１　中島遺跡　調査地（南より）

１－２　中島遺跡　重機掘削状況

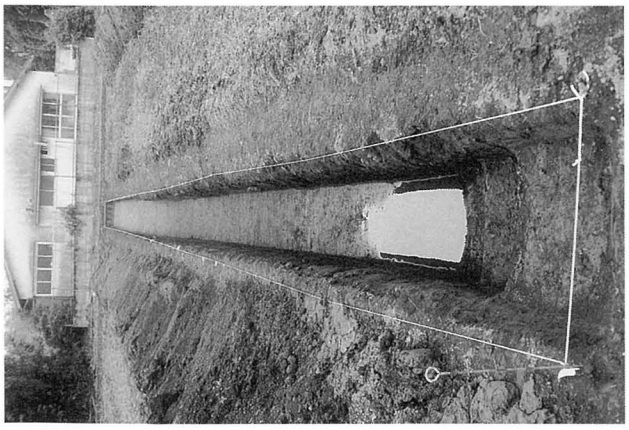
１－３　中島遺跡　４Ｔ完掘（南より）▲



２－１　咄戸沼遺跡　調査地（西より）

２－２　咄戸沼遺跡　１Ｔ完掘（東より）▲

３－１　志柄１遺跡　調査地（北より）



３－２　志柄１遺跡　２Ｔ完掘（北より）▲

４－１　南美園町遺跡　調査地（南より）

写真図版２

４－２　南美園町遺跡　１Ｔ完掘（南より）▲

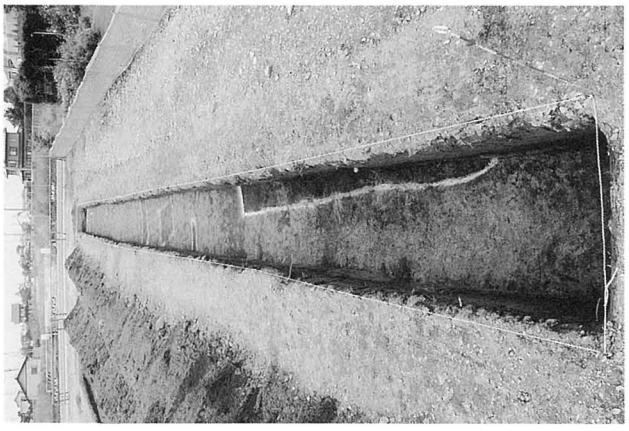
５－１　大袋４遺跡　調査地（西より）

５－２　大袋４遺跡　４Ｔ完掘（東より）

６－１　大街道遺跡　調査地（北より）

６－２　大街道遺跡　１Ｔ完掘（南より）▲

７－１　八方遺跡（平17A）　調査地（西より）



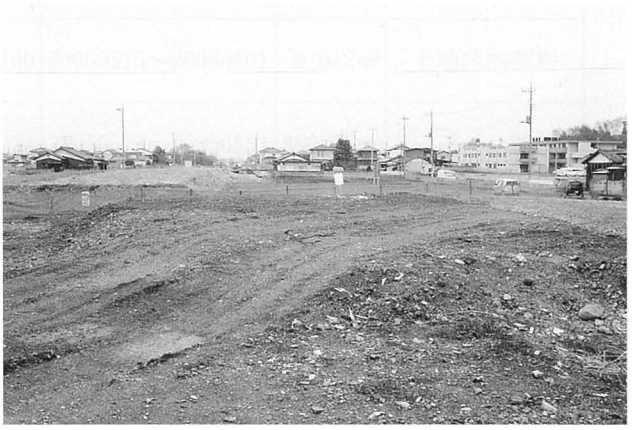
７－２　八方遺跡（平17A）　１Ｔ完掘（東より）▲

７－３　八方遺跡（平17A）　１号住居址

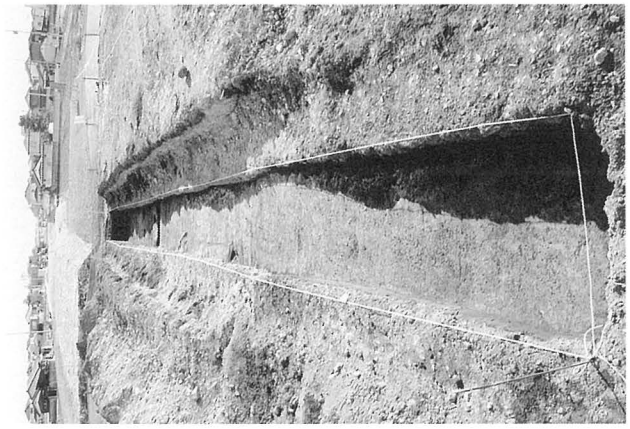
８－１　高根古墳群　調査地（北より）

８－２　高根古墳群　調査状況

８－３　高根古墳群　１Ｔ完掘（北より）▲



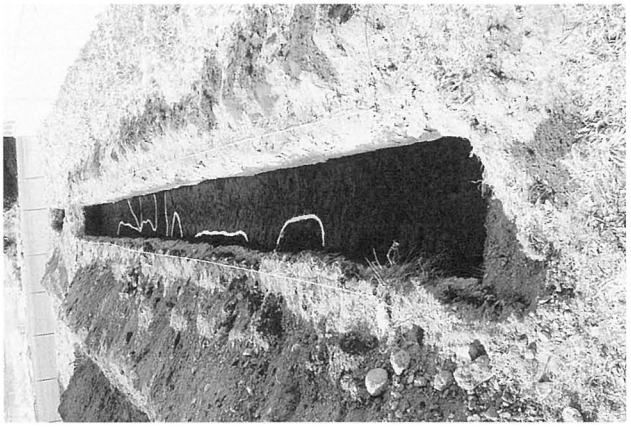
９－１　八方遺跡（平17B）　調査地（西より）



９－２　八方遺跡（平17B）　１Ｔ完掘（西より）▲

10－１　中堤遺跡　調査地（東より）

10－２　中堤遺跡　調査状況



10－３　中堤遺跡　１Ｔ完掘（東より）▲

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第42集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成17年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

編集・発行　館林市教育委員会　文化振興課　文化財係（館林市文化会館内）
〒374-0018　群馬県館林市城町３番１号　電話0276-74-4111
印　　刷　朝日印刷工業株式会社
発行年月日　平成18年３月31日

© Tatebayashi City Board of Education 2006 Printed in Japan

文化財愛護シンボルマーク

故郷の文化・歴史を過去、現在、そして未来へ